

フイエルバッハにおける人間学の意図と限界

末次, 弘
九州大学文学部 : 助手

<https://doi.org/10.15017/27411>

出版情報 : 哲学論文集. 3, pp.33-51, 1967-09-30. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

フォイエルバッハにおける人間学の意図と限界

末次 弘

一、緒論

フォイエルバッハが人間をどのように捉えているかを明確にすることによって、フォイエルバッハの人間学の意図とその核心を明らかにすることができるであろう。同時に、その作業は私をフォイエルバッハの哲学に近づけるであろう。なぜなら、一般にフォイエルバッハの哲学は人間学として特徴づけられているから。

まず、フォイエルバッハにおいては、人間が哲学の対象である、しかも唯一の、普遍的な、最高の対象である。その人間とは人間の土台としての自然を含めた人間である。この場合、「人間の土台としての自然」とは身体にはかならない。なぜなら、フォイエルバッハにおいて、自然は事実存在から区別されない本質であり、人間は事実存在から自己を区別する本質であるから。¹⁾ところで、身体は感性的なものである。感性的なものは時間と空間における一点にしか存在しえない。したがって、身体をそなえた人間は世界のなかに存在する。世界についての意識はわたしの被制限性の意識である。しかるに、わたしの自我性の無制限性が打ちくだかれる最初の躓きの石は汝、即ち他我である。わたしが世界に依存していると感じるのは、わたしがまず、他人に依存しているのを感じるからである。²⁾だから、フォイエルバッハにおいても、世界は無人の世界ではなく、他の人間が共に存在する世界である。

他方、フオイエルバッハにおいて、このような人間を対象とする哲学の主体、荷い手は同様に全的な人間であつて、自我や、抽象的な精神などではない。思惟するのは身体をそなえた、生きた人間であつて、自我や、それだけで存在する理性などが思惟するのではない。しかも、或る客体が与えられるのはわれ(Ich)にたいしてでなく、われならざるもの(Nicht-Ich)にである。そのさい、現実的な客体がわたしに与えられるのは、わたしに働きかける存在者(Wesen)がわたしに与えられる所³⁾だけ、即ち、わたしの自己活動が他の存在者の活動においてその限界を、抵抗をみいだす所³⁾だけ、である。それ故、全的な人間、即ち、世界の中に、他人と共に在る、身体をそなえた、生きた人間がフオイエルバッハにおける哲学の客体であり、また、哲学の主体である。

まず、フオイエルバッハの哲学全体において人間の占める位置を、私は確定した。次に、その人間の特徴を素描した。当然のことながら、この素描はフオイエルバッハの捉えている人間をその輪郭においてしか、示していない。もっと立ちいって明確にするため、いま素描したばかりの全的な人間を、フオイエルバッハの著作に即して分節し、構造的に捉えようと思う。

分節するにあたって、『哲学改革のための暫定的提言』にみられる次のような言葉を手掛りにすることができるように惟われる。「哲学の課題は無限なものを有限なものとして認めることではなく、有限なものを有限でないもの、即ち無限なものとして認めることである」⁴⁾この言葉にしたがえば、人間は有限なものであり、かつ無限なものである。有限な人間において、無限なものとはなにを指しているのか。フオイエルバッハによれば、無限なものは有限なもの⁵⁾の真の本質である。有限な人間において、無限なものとは人間の本質である。したがって、フオイエルバッハにおいて人間の本質とはいかなることを指し示しているかを明らかにすることから始めねばならない。

ところで、フオイエルバッハにとって、人間の本質は人間の人間との結合のうちに、統一のうちにしか存在しな

い。「自分だけ孤立した人間は自己のうちに道徳的本質としても、思惟する本質としても、人間の本質をもっていない」⁵⁾「いかなる存在も、それが人間であれ、神であれ、また精神であれ、それ自身だけでは真の本質、完全な本質、絶対的な本質ではない。真理と完全性はたゞ、本質の等しい本質間の結合、統一⁶⁾だけである」人間の人間との結合、統一とはなにを意味しているか。しかし、それを確定する前に、私は次の問いを先決しなければならぬ。人間の人間との結合、統一とは或る人間と他の人間とのなんらかの結合、統一の状態を意味するのか、それとも、一個の人間において他の人間がなんらかの仕方⁷⁾で問題となる場合の存在構造を意味するのか。言葉の上だけでは前者を意味するように読めるが、私はフォイエルバッハの記述をとおして、直接、今、この問いを確定しないでおくことにする。なぜなら、フォイエルバッハの記述は不十分だし、また、この点でフォイエルバッハの人間学の限界が問題となるように惟われるから。それにしても、もし人間の人間との結合、統一がフォイエルバッハにおいて前者を意味しているとしても、或る人間と他の人間との結合、統一の状態は後者に基づいてのみ成立するのであるから、一個の人間において他の人間がなんらかの仕方⁸⁾で問題となる場合の存在構造をみきわめ、そこから前者を論じるのでなければ、厳密な考察とは言えないであろう。したがって、人間の人間との結合、統一は後者であると仮定しても不当ではないであろう。存在構造の点で、一個の人間において他の人間がなんらかの仕方⁹⁾で問題となる根拠はフォイエルバッハの場合、類(Gattung)の概念に求められる。それ故、人間の本質とはどのようなものであるかを明らかにする前に、フォイエルバッハにおける類の概念を明確にするのが適当であるだろう。

註

- (1) Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie. S. 240
(L. Feuerbachs Sämtliche werke, neu herausgegeben von Bolin und Jodi 10Bde)
- (2) Das Wesen des Christentums. S. 99 ~ S. 100
- (3) Grundsätze der Philosophie der Zukunft. S. 296

(4) Vorläufige Thesen zur Reform der Philosophie. S. 230

(5) Grundsätze der Philosophie der Zukunft. S. 318

(6) Ebd. S. 319

二、フオイエルバッハにおける類の概念

フオイエルバッハによれば、人間の本質であるところのものは理性 (Vernunft)、意志 (Wille)、心 (Herz) である。これらは人間において類を構成するものである。したがって、理性、意志、心は類的能力である。一個の人間にはこれら類的能力が帰属する。そのさい、人間はこれら諸力を持つのではない。そうではなくて、これらは人間が持つことも、作りだすこともできない人間の本質を基礎づけるものである。これらは一個の人間が成立するその基点に、人間の意志を超え、絶対的に帰属する諸力である。したがって、これら諸力が人間を規定し、支配し、生気づけるのである。

フオイエルバッハにおいて、類とは個がそこにおいて在る一時代の人間の総体、及び過去と未来の全人間の総体とを意味する。総体としての類が人間の本質である。この総体としての類、即ち人間の本質は類の諸規定が万人の中で総括されるときにだけ、その事実的存在をもつ。換言すれば、現実には多様な諸述語の無限の充溢 (Eule)、或いは無限の集合 (Menge) は多様な諸個人の無限の充溢、或いは無限の集合においてだけ実現され、確認される。なぜなら、確かに万人のうちに在る同一の力が各人のうちに在るのだが、同一の力は固有な力、新たな力として現われるよう規定され、性質づけられているから。各々の新たな人間はいわば人類の新たな述語である。それで、人間の本質は多様な述語からなる無限の富であるが、述語は感性においてのみ、つまり時間と空間においてのみ存在するので、一個人ではなく、多様な諸個人からなる無限の富である。

類の概念をこのように総体として捉えるフオイエルバッハは類と個との直接的な統一を拒絶する。彼によれば、キ

リスト教の神は類と個との直接的統一である。キリスト教において、神は個体としての類の概念である。即ち、神は類として、つまりあらゆる性質の総体として、かつ同時に個人的個別の本質であるような類の概念である。そこでは、多様な述語の無限な多が人間の本質から分離され、一つの独自の本質へと結合され、この本質が人間とは根本的に異なる人格の本質として捉えられている。個体は類の意義をもち、それだけで類の完全な現存在とみなされている。つまり、個体は直接的に類と同一視され、類が個に解消されている。この類と個との直接的な統一のもっとも明確な表現はキリストである。しかし、キリスト教的キリストは歴史の midpoint ではなく、歴史の終点である。それ故、類と個との直接的な統一は理性と自然との限界を超えている。類と個との直接的な統一は實在性のない、理性に反する表象である。

三、個と類との関係

類的能力である理性、意志、心はフ・イエエルバツハによれば、類の本質において、またそのものとして、無限であり、完全である。類の本質において無限であるのは、総体としての類は無限であるからである。例えば、わたしの知識は制限されている。しかし、わたしの制限は他人の制限ではない、いわんや、人類の制限ではない。或る時代にとって不可能で、捉えることのできないことも、次の時代には捉えることができ、可能である。また、類的能力がそのものとしては無限であるのは、あらゆる本質は自己にたいしては無限であり、自己自身のうちに自分の最高の本質をもっているからである。例えば、もしわたしが無限なるものを思惟するとすれば、わたしは思惟能力の無限性を思惟し、かつ確証しているのである。

ところで、フ・イエエルバツハによって設定されたこの二つの条件が除かれるとき、類的能力は無限でなくなり、制限されたものとなるであろう。しかるに、この二つの条件は必然的に排除される。なぜなら、類的能力が現実的に存

在するのは個体としての人間においてだけであり、この個体としての人間は世界のなかに、他人と共にしか存在しないからである。それ故、類的能力、及びその対象化されたものである類の諸規定は個体としての人間においては制限されている。このように制限されている個体としての人間は事実、自分を制限されたものと感じたり、認識したりするが、このことはいかにして可能であろうか。フォイエルバッハによれば、人間の個体が自分の制限、自分の有限性を意識するのは、類の完全性、無限性が個体としての人間にとって対象であるからである。類の完全性、類の無限性はいかなる仕方でも、個体としての人間にとって対象となるのだろうか。フォイエルバッハによれば、他者をとおしてである。フォイエルバッハにおいて、他者に対する関係は性愛(Liebe)と友情(Freundschaft)というたゞ二つの態度だけである。性愛は性的区別の枠内における類の自己感情である。したがって、個体としての人間は性愛において、類の完全性と係わるのである。友情は補完衝動(Ergänzungstriebe)にもとづいたものである。友情はわたしの欠陥を友人の徳によってあがなうのである。わたし自身は完全でありえないとしても、わたしは少くとも友人における徳を、完全性を愛するのである。つまり、個体としての人間は友情において、友人の完全性と係わるのである。性愛と友情という他者にたいする二つの態度に共通していることは、他者が類の媒介者である点である。しかし、他者もそれ自体としては制限されたものだった。制限されたものとの関係において、いかにして私は無限なもの、完全なものに係わることが可能であろうか。フォイエルバッハのように、この他者を人類の代表者、つまりわたしのために必要な多くの他人の代りをしてくれ、わたしにとって普遍的な意義を持っている者に見立てることは不可能である。なぜなら、もし他者が人類の代表者でありうるなら、他者からみれば私も人類の代表者でありうるものでなければならぬ。私が人類の代表者であるなら、私は私であるかぎりでも、常に、既に無限なものに係わっているのである。さらに、友人において相対的な完全さに出会うとしても、私が友の完全さを実在的には欠いていても、もし私のうちに、なんらかの仕方でも友の完全さと係わる完全さを持っていないなら、私は友の完全さを完全さとして認めることさ

えできないであろう。それ故、個体としての人間が単に制限されたものであるかぎり、いかなるものによっても、いかなる仕方によっても、無限なものに係わることはできない。

宗教は人間を動物から本質的に区別するものにもとづいている。換言すれば、人間は必然的に、なんらかの形で宗教を持つ。即ち、人間は必然的になんらかの神を思惟する。ところで、人間が必然的に神を思惟することができるためには、人間はいかなる存在者でなければならぬであろうか。フ・イエエルバツハによれば、神について主語の必然性はもっぱら述語の必然性のうちに在る。述語は固有の、独立な意義をもっている。述語はその内容によって直接、真なるものとして自己を人間にたいして証明する。それに反して、主語は述語によって規定されたものである。したがって、主語をして或るもので在らしめているものは、もっぱら述語のなかに横わっている。さらに、神的述語は一方で一般的なものであり、他方では人格的なものである。一般的な述語は宗教の特徴的な規定ではない。宗教の本質を基礎づけるものは人格的な述語である。人格的述語とは、例えば神は人格であり、道徳的立法者、人間の父、義者、慈悲深い者である、などという命題である。これらの述語から、人格的な述語としての神的述語は人間の述語にほかならない。神的述語の主語は神ではなくて、人間の本質である。したがって、神の本質は人間の本質が個々の人間の制限から引き離されて、対象化されたものである。人間が神を思惟するとは、他の独自の本質としてではなく、人間が彼の本質を思惟することにほかならない。それ故、人間が必然的に神を思惟することができるためには、人間は自分の本質を対象にすることができればよいわけである。人間はそれが可能である。なぜなら、人間とはその本質が自分にとって必然的に対象であるところの存在者であるから。

人間は思惟する。したがって、人間は必然的に神を思惟する。しかし、思惟が成立するとき、即ち類の本質が自分にとって対象であるとき、思惟の対象としての類の本質はなにを指しているのであろうか。人間が神を思惟するにあ

たり、自分の本質を個体の制限から引き離すことは、空想においてだけ可能であるとしても、この分離が可能であるために、個体としての人間は個体としてのまゝで、なんらかの仕方において、無限なものと同様になっているのではないだろうか。なぜなら、もし個体としての人間が単に制限された存在者であるなら、どうして人間の本質を自分の制限から切り離し、対象化することができるであろうか。その時は、自分の制限を制限として感じることをささげられないであろう。

他方、人間を動物から本質的に区別するものは厳密な意味での意識である。フォイエルバッハによれば、厳密な意味での意識が存在するのは、或る本質にとつてその類が、即ちその本質性が対象であるところだけである。人間はまさしくそのような存在者である。人間において、意識の対象である類はいかなる意味での類であろうか。フォイエルバッハにおいて、私は二つの類の概念をみいだした。まず、総体としての類は個体としての人間と直接的に係わることはできなかった。他者による間接的な関係を、私は退けた。それで、総体としての類は個体としての人間において、対象であることはできない。次に、類的能力としての類は個体としての人間に絶対的に帰属するので、類的能力としての類は意識の対象であるように見える。しかし、フォイエルバッハによれば、意識は無限なものについての意識であつて、制限された意識は決して意識ではない。しかるに、類的能力は個体としての人間においては制限されていた。それで、類的能力としての類は厳密な意味での意識の対象である類でありえない。確かに、フォイエルバッハは無限なものについての意識を意識の無限性から説明している。けれども、意識は現実的には知覚的意識、概念的意識、想像的意識などとしてしか、存在しえない。知覚、理性、想像力などの類的能力は個体としての人間においては制限されていた。したがつて、無限なものについての意識を、対象の無限性からでなく、意識の無限性から説明することはできない。かくて、フォイエルバッハの二つの類の概念をもつてするかぎり、人間において意識の対象である

類に、私は達することができない。

しかしながら、自分を有限なものとして捉える人間、及び神を必然的に思惟する人間についての考察によって、個体としての人間はなんらかの仕方、端的に無限なものに係わっていることを、私はみいだしていた。それ故、なんらかの結論を下す前に、フョイエルバッハが明確にしなかった点をよく考えることにより、またこれまでの考察をとおして、類についての別な概念をみいだせないかどうか、その概念に基づいて、今逢着している困難を解決することができないかどうか、考えることが残されているように惟われる。

註

(1) *Das Wesen des Christentums*. S.184.

(2) *Das Wesen des Christentums*. S.10.

四、新たな類の概念とそれら概念相互間の関係

類的能力にかんして、個と類とは直接的な関係であった。こゝで直接的と言う意味は、類は個に個の意志を超えて、絶対的に帰属すると言うことである。それで、人間はこれら類的能力を一方的に受けられるほかない。つまり、これらを受けられるか、否かについて、人間の自由、人間の主体性はまったくくない。

ところで、類的能力とは理性、意志、心であった。理性、意志、心は人間の本質であった。この人間の本質は根源的な意味で人間の本質と言えるであろうか。例えば、思惟はなにに、基づいて、なにに、向って思惟するのか。仮りに、思惟は思惟の基礎とその目標とをそれ自体のうちに持っているとしよう。意志も、心も、また同様であるとしよう。しかし、理性、意志、心はこのようなものであっても、それにおいて統一され、それに基づいて互に協力することが初めて可能となるものをもたねば、要のない扇の骨のようにばらばらで、死んだものでしかないであろう。理性、意

志、心を生きたものたらしめるのは、これらを個の意志を超えて個に帰属せしめる類にほかならない。類的能力としての人間の本質を個を超えて個に帰属せしめる類こそ、根源的な意味で人間の本来の本質と呼ぶことができる。したがって、人間がいかなる存在であるかということは、個体としての人間の思考や、意志を超えて、既にその成立の基点において絶対的に規定されているのである。人間はこの規定の上で、この規定に照応すべく生きることだけしかない。絶対的規定は人間の成立の基点に、個体としての人間に帰属するので、すべての人間はこの絶対的規定のもとに在り、生きて在るかぎり、その都度新たに規定される。この常に新たな絶対的規定にたいし、人間は応えないことの許されない仕方、で、応えるべく規定されている。

理性、意志、心を含めたすべての類的能力を個に帰属せしめ、人間をその本質において根源的に、絶対的に規定するものを、個を超えて個に帰属する類と私は呼ぶことにする。個を超えて個に帰属する類はいかなる媒介もなしに、端的に個と一である。

次に、総体としての類にかんしては、個と類とは直接的な関係ではありえなかつた。こゝで直接的という意味は実在的ということである。フォイエルバッハは個と類との実在的な統一を不合理なものとして否定した。この否定はまったく正当である。しかし、フォイエルバッハは総体としての類と個を他者の媒介によって間接的に関係づけた。これにたいして、もし個が単に制限されたものであるなら、他者は個に総体としての類を媒介することができないことと、個体としての人間は実在的な在り方ではないが、他のなんらかの仕方で端的に無限なものと同様であることを、私は示した。ところで、総体としての類は無限なものであつた。それで、総体としての類は端的に個と係わっているであろう。いかなる仕方で係わっているであろうか。フォイエルバッハによれば、人間の本質は一であり、その本質の現存在は相互に補充しあふ無限の多である。こゝで言う人間の本質は総体としての類と同義である。個体としての人間であるフォイエルバッハは現実に多様な諸個人の無限の述語を一として表象している。したがって、もし総

体としての類が思惟において、関係の在り方によって、フ・オイエルバッハと端的に係わっているものでなければ、実在的には相互に補完しあう無限の多を本質において一であると、無限の多の中の一つにすぎないフ・オイエルバッハが表象することは不可能であろう。それ故、総体としての類と個は実在的な在り方でなく、関係の在り方²⁰で、媒介なしに、端的に一である。

類的能力としての類と総体としての類との関係は、対象化する能力とそれの対象化されたものとの関係である。思惟するもの、意志するもの、愛するものという人間の普遍的述語の限定内で、諸々の特定のな述語は対象化されるのである。

最後に、関係の在り方で個即類である総体としての類は、つまり総体としての類についての意識は、先に規定した個を超えて個に帰属する類といかなる関係にあるのだろうか。総体としての類は現実には多様な諸個人の無限の述語であった。このさい、述語とは対象化されたものである。対象化しうる能力も含めて、対象化は個を超えて個に帰属する類の絶対的規定との関係において、絶対的規定にたいする人間の具体的な、主体的な応えとして行われる。それで、個を超えて個に帰属する類は関係の在り方における総体としての類と同一ではなく、前者は後者の土台である。前者の存在は後者に依存してはいないが、後者が前者を離れて存在しえないように、個を超えて個に帰属する類は総体としての類、及び総体としての類についての意識を離れて存在しない。個を超えて個に帰属する類は人間の具体的活動の土台であり、意味であり、裏側である。その限りで、個を超えて個に帰属する類は人間の具体的活動に表現される。こゝで表現という意味は、前者が人間の具体的活動に流出し、溶けこみ、それと合体するというような意味ではない。それ故、人類がこれまで対象化し、現に対象化し、またこれから対象化するであろうものの、関係の在り方における全体たる総体としての類をとおして、個を超えて個に帰属する類を概念的に捉えようとすることができる。このようにしてなされる省察によって、私たちはその都度新たな絶対的規定にたいして、より適確に照応する手掛りを

みいだすことができるし、またそうするほかない。

個を超えて個に帰属する類は人間存在の成立の基点に、原初的構造として存在する。人間の存在が出来事としてのかぎり、いかなる説明も不可能であると同様、個を超えて個に帰属する類は原因の意味で、いかなるものからも引き出すことができず、なにものによつても説明されえない。個を超えて個に帰属する類は現実的であるが、感性的でないという意味では無である。関係の在り方における総体としての類はこの無の無限の形而上的空間に、個を超えて個に帰属する類が、対象化する人間の活動を介して反射されたものである。

註

(1) 類的能力についてのフォイエルバッハの規定は、こゝでいう人間の木質に触れており、踏まえられている。しかし、それは明確な仕方ではなく、ぼんやりした仕方ではなされている。その不徹底が大きな困難をひき起すことになった。

(2) 関係の在り方とは意識の在り方のことである。関係という多義的な用語をもちいたのは実在という言葉に対比させるためと、意識という言葉を用いたさいに生じる観念論的印象を避けるためである。関係という用語のこのような使い方はサルトルにおいてもみられる。cf. *L'être et le néant*. p. 424 etc.

五、人間の本質についての規定

フォイエルバッハにおける類の概念をみてゆくなかで、人間の本質についての規定が類の概念に対応していることをみいだした。ところで、類の概念の検討はフォイエルバッハにおいて人間の本質と呼ばれているものが何を指しているか、それを明確にするため行われたのであった。したがってまず、フォイエルバッハにおける人間の本質についての規定を整理し、それら規定間の関係を明らかにするのが適当であるだろう。そのさい、先に行つた類の概念の検討と重複するところが生じるであろうが、事態を明確にするため、敢えて重複をおかそうと思う。

(1)、人間の木質は理性、意志、心である。一個の完全な人間には思惟する力、意志する力、心の力が帰属する。

思惟力は認識の光であり、意志力は性格の力であり、心の力は愛である。理性、意志力、愛は完全性であり、最高の諸力であり、人間そのものの絶対的本質であり、人間の定在の目的である。¹⁾

人間は理性、意志、心なしには無であり、それらによつてはじめて、人はそれが在るところのものである。したがつて、理性、意志、心は人間が所有している力ではない。つまり、人間は人間の本質を持っているのではなく、また作りだすでもない。そうでなくて、理性、意志、心が人間の本質を基礎づける要素として、人間を生気づけ、規定し、支配する力として、神的で、絶対的な諸力である。²⁾

(2)、人間の本質の現実的な定在は本質の富を顕わすために相互に補完しあう無限の多様性である。³⁾したがつて、人間の本質は種々な述語からなる無限の富である。ところで、現実には多様な諸述語の無限の充溢、或は無限の集合は種々な本質、或いは種々の諸個人の無限の充溢、或いは集合においてだけ実現され、確認される。それ故、人間の本質は種々な諸個人からなる無限の富である。⁴⁾

(3)、人間は二重の生活を持つ。即ち人間は内面生活と外面生活とをもつ。人間の内面生活は自分の類との、自分の本質との関係における生活である。したがつて、人間にとっては単に自分の個性ではなく、自分の類、人間の本質が対象である。⁵⁾

人間の本質は宗教の根拠であるだけでなく、宗教の対象である。ところで、宗教は無限なものについての意識である。したがつて、人間の本質は、人間の類は無限な本質である。

「事実存在するということは人間にとつて第一のことであり、人間の表象における根本本質であり、述語の前提である」⁶⁾とつて、一個の人間が事実存在するとき、類的能力としての人間の本質、即ち理性、意志、心が絶対的に帰属するものとして、彼は事実存在する。理性、意志、心は或るものを思惟する力、或るものを意志する力、或るものを感ずる力である。したがつて、一個の人間が事実存在するや、或るものを思惟するものとして、あるいは或るものを

意志するものとして、あるいは或るものを感じて事実存在する。つまり、特定の述語をその都度持つのである。人間がその都度選びとる諸々の述語は理性、意志、心という類的能力としての人間の本質の対象化されたものである。理性、意志、心は特定の諸述語を離れて、その外に存在することはできない。他方、これら特定の諸述語は理性、意志、心という類的能力にもとづき、その限定の内部で、それの特定の形としてしか現われえない。けれども、理性、意志、心という述語を特定の諸述語から区別することができるし、また区別しなければならぬ。一方が他方の土台である述語を、つまり理性、意志、心を、私は普遍的述語と呼ぶことにする。両者が共に述語であるのは、類的能力としての人間の本質である普遍的述語が人間を、主語をはなれて在りえないように、普遍的述語にもとづいて生ずる特定の述語も人間を、主語をはなれて在りえないからである。

上記した(1)は普遍的述語であり、(2)は特定の述語である。それ故、(1)と(2)との関係は、つまり類的能力としての人間の本質と総体としての類である人間の本質との関係は普遍的述語と特定の述語との関係にほかならない。

次に、上記(1)、(2)と(3)の関係はどうであろうか。(3)は(1)、(2)での人間の本質が人間にとって対象であるということにほかならないようにみえる。しかし、事実、(1)、(2)での人間の本質は人間にとって対象であるだろうか。個体としての人間以外に、人間は存在しない。ところで、フォイエルバッハによれば、類的能力は個体において制限されていた、無限ではなかった。もし個がたんに制限されたものであるなら、類的能力としての人間の本質は人間にとって対象であることはできない。類的能力としての人間の本質の現実的な定在は、特定の述語として、無限の多として存在する。しかるに、述語の無限の多は、フォイエルバッハによれば、諸個人の無限の多においてしか実現されず、確認されない。それで、総体としての類である人間の本質も個体としての人間にとって対象であることはできない。かくて、(1)、(2)と(3)とは内的な連関をもつことができない。これは三節において、私の出会った事態と同じものである。即ちそこでは、フォイエルバッハの二つの類の概念をもってするかぎり、人間において意識の対象である類に、

私は達することができなかった。それで、私は新たな類の概念をみいだす方向をとった。こゝでも同様に、人間の本質についての新たな規定をみいだすことによって、(1)、(2)と(3)とを、内的にに連関づけることが可能であるように惟われる。

四節において、私は類的能力としての人間の本質を根源的な意味での人間の本質ではないとした。そして、すべての類的能力を個に帰属せしめ、類的能力がそれによって基礎と目標を与えられ、それにおいて統一され、それに基づいて互に協力することが初めて可能となるもの、つまり人間をその本質において根源的に、絶対的に規定するものを、根源的な意味での人間の本質とした。この意味での人間の本質は人間にとって、端的に対象である。しかも独特な權威をもった、特殊な対象である。「独特な權威をもった」という意味は、根源的な意味での人間の本質が、その都度人間をその本質において絶対的に規定するものとして人間に係わっているの、人間によって取り去られることも、避けられることもなく、いやおうなく、人間にとって対象であるということである。「特殊な」というのは、それは人間にとって最初で最後であるもの、人間の生命の源であるものであり、そのようなものとして直接的に対象であるが、感性的な対象とは異った仕方に対象となることを意味する。

この根源的な意味での人間の本質は個を超えて個に帰属する類の別な表現であった。それで、根源的な意味での人間の本質は概念的には、関係の在り方での総体としての類をとおして近づかれる。関係の在り方での総体としての類は総体としての類についての意識にはかならなかった。したがって、総体としての類である人間の本質は関係の在り方での総体としての類をとおして、人間の対象である。それ故、(1)、(2)は根源的な意味での人間の本質に基づき、関係の在り方での総体としての類をとおして、(3)と内的に結ばれる。類的能力としての人間の本質、総体としての類である人間の本質、根源的な意味での人間の本質、及び関係の在り方での総体としての類、これら四つは人間の存在構

造の基本をなすものであって、時間的には先後関係はない。

フォイエルバッハにおける人間の本质についての規定は類的能力としての人間と総体としての類である人間の本质との二つであった。両者は普遍的述語と特定の述語との関係であった。それらは人間にとって対象であるかのごとく言われた。しかし、フォイエルバッハの規定を守るかぎり、それらは一個の人間にとって対象となることができなかった。それで、類の概念の場合と同様、人間の本质についての新たな規定をみだし、そうすることによって、私は問題を解決した。

ところで、問題が生じたのは、個が単に制限されたものであるという条件のもとでは、他者に類の媒介者としての役割りを、私が拒んだからである。他者に類の媒介者としての役割りを条件なしに認めるフォイエルバッハは、確かに私が直面した問題に出会わなかった。しかし、彼は別な問題に直面することとなった。別な問題とは、私が緒論において出会ったものにほかならない。フォイエルバッハにとって、人間の本质は人間の人間との結合、統一のうちにか存在しないのである。種々な諸個人の無限の充溢からなる現実に多様な諸述語の無限の充溢としての人間の本质が他者との結合、統一においてだけ個体としての人間にとって存在するのは、他者がわたしのために必要な多くの他人の代りをしてくれ、わたしにとって普遍的な意義をもっているからである。しかし、もし私が関係の在り方での総体としての類と端的に係わっているものでなければ、他者は人類を代表することはできないであろう。なぜなら、他者は私の持つ諸述語を除いた、他のすべての人からなる無限の諸述語を体现することは、実在的に持つことは不可能であるから。けれども、いま仮りにフォイエルバッハが言うように、無条件に他は類を代表することができるという。そのとき、人間の本质がそこにだけ在る人間の人間との結合、統一とは、一個の人間において他の人間がなん

らかの仕方では問題となる場合の存在構造ではなく、或る人間の他の人間とのなんらかの結合、統一の状態にほかならない。

フオイエルバッハにおける哲学の主体であり、かつ客体でもある全的な人間を、私は緒論においてまず、素描した。次にこの全的な人間をより明確にするため、フオイエルバッハの著作に即して分節し、構造的に捉えようとした。そのさい、哲学の課題は「有限なものを有限でないもの、即ち無限なものとして認めることである」という言葉を手掛りにした。有限な人間において無限なものとは、人間の本質であった。フオイエルバッハにとって、人間の本質は人間の人間との結合のうちに、統一のうちにしか存在しない。ところで、いま見たように、人間の人間との結合、統一とは或る人間の他の人間とのなんらかの結合、統一の状態であった。したがって、人間の本質、即ち人間における無限なものとは存在構造として一個の人間に帰属するのではない。それ故、一個の人間を有限即無限として認め、捉えようとするフオイエルバッハの意図は即ちこの点にかんして充分に実現されたと言ふことはできない。

註

- (1) Das Wesen des Christentums. S. 3.
- (2) Ebd. S. 3~4
- (3) Ebd. S. 190
- (4) Ebd. S. 28
- (5) Ebd. S. 2
- (6) Ebd. S. 23

六、結 び

フオイエルバッハにおいて積極的なものはまずその対象である。彼の哲学の対象は自我でも、自己意識でもない。それは身体をそなえた、感性的な人間、世界のなかに、他人と共に存在する生きた人間である。

次に、フォイエルバッハは人間の本質と、即ち自己自身と自覚的に係わり、自己との統一において生きようとしたことである。人間は必然的に自己を対象化する。しかし、まず大抵、人間はこの対象を自分の本質として認めない。人間は自分の本質のうちにみいだす前に、それを自分の外に立てるのである。そこでは、自分の本質が自分とは別な本質として、人間にとって対象である。人間は自分とは別な本質として対象化された自分を支えとし、目標とし、価値として生きるのである。これに反して、フォイエルバッハは人間に対して外的で、独自のものとして現われ、人間を支配するこの対象を、人間の本質へと取りもどし、人間そのものに人間を超えて帰属する規定に即して生きようとした。

したがって最後に言えることは、フォイエルバッハはこの全的な人間が単に有限なものではなく、有限即無限なものであること、つまりそれ自体で、即ちそれとは別な神的であるものを介することなしに、端的に神的であることをみいだし、認めたことである。

フォイエルバッハの人間学における限界は、まず五節において明らかになったように、人間が対象化したものを人間そのものの本質として人間に還元したあと、さらにそのような対象化が可能である人間をその存在構造において明確にしようとしなかったことである。そのため、主体の内でありながら主体を超えたものは、自覚的に考察の対象とならなかった。したがって、人間を有限即無限なものとして捉えようとした意図は、即ちこの点にかんしてずれを生じ、あいまいになり、充分に実現されえなかった。

次に、人間が対象化したものを人間そのものに還元するさい、フォイエルバッハは一方的に還元を行ったことである。「主体が本質的、必然的に係わる対象はこの主体自身の本質にほかならない、ただし対象となった本質であるが」⁽¹⁾ この命題によって、彼は考察を進めた。しかし、この命題は反省的意識の次元でも、反省以前の意識の次元でも一面的である。サルトルの用語を借りれば、反省的意識の対象は反省以前の意識である。反省以前の意識は即自存

在 (*Frei-en-soi*) に根ざされ、即自在との関係としてのみ成立する。それで、反省以前の意識は主体と即自在との共同出資である。これを主体にだけ還元することは不可能である。確かにフオイエルバッハ自身はいつの場合でもこの命題にもとづいて考察を進めているわけではないが、それは彼において根本的な命題の一つであることに変わりはない。

最後に、フオイエルバッハは全的な人間を哲学の対象にしたが、内面生活にかんしてだけしか取り上げなかった。それ故、マルクスも指摘するように、⁽²⁾ 他者にたいする関係の貧弱さ、社会にたいする無自覚さと共に、フオイエルバッハは全的な人間をその全的な活動において捉えることができず、その意味で抽象的な人間学の域を出なかった。

註

(1) *Das Wesen des Christentums*, S.5.

(2) *K. Marx: Deutsche Ideologie. (Die Frühschriften, heraus. S. Landshut)* S.351~S.354.

(本学文学部倫理学助手、昭和四十二年度本学大学院博士課程退学、倫理学)